

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN

百六十七回
百七十六回



犬傳九轉下卷
上



門曾
號
卷

600
77



○近例の如く下唇を上唇ついで引てまで渴氣を
そると誤脱をあらわすとよよみうへてとてだ
不文とぞやんぐよ昔柏子ハ有りて其柏子よ
よりて評外を益のえきのな外也くあらは
又かの不文唇をあらう我あらは其意をば
ゆるがまきるよゆるまばそとまひてくらうへ
さうでこまくら遠きうづくゆうどきくいよく
ゆしづくあともあらう勿論るもくせなよ限ば
あともも因ねむどかの茅柏子もくらうへとお
産ハことを一きやうくやうどそのえをまかせの

便りあつて書くとまことにスヰスラキツクはもとより例
なじバとまんかくまんじ難笑ふまをてす有めがみど
するもあらず田五箇條呂くはうと見ハざりつも
よみてアヌハ何とんぐどへと鑒談和論といつ
やうよアヌのうほくそんざるは數多すあだにたまき
淫威もつまておよこくまことひてすえ或ハふと
えてハがえべきわざれどよくてふばづふからりとやあ
を解きこまうとあどやうあれバ田舎のさちよあ
ざるほどハは無さんよ、自れとちうべづみど
お一見してハふとやあくまでくのやうよつてわや

やんあまく評あつまむせかくと、うたへる甲斐す
あ評さうちひよあまくせきうじと、うとういそみ
りとくらはさあくざともかうも鑒理うるみを
のうの又あうてハたへくひそとあざこまうと
そぐくくろハ失教ふまくしかーこんばくみゆ
係どもを除まきりおえの筆柏子のせまく者
きまくらきまくとてめてとてて改書よみ
とくなどとくらみとて百丁あまり改書よみ
るうとあうぞと本ハは裏眼ひぶのゆく出番あ
まくひぐく早えハ一めのは笑りえよいをまく

○一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

ヤマギリ曰爾の穴とさうてみてハクツテテ
ラムバ
○奉賛たゞめまうらアタマシムモソウモサム
佐局大密アミタラの洲寄の火焚きでかく
はとすあに國府臺の三外のゆよハホトヨ
其餘のゆよもぐれがんと御てアズモハハシキ
アヌのゆよまくやうよかよふよが其の
うそよく去へむハニカニアヒハ淡うのまく
をゑこ行徳ハまち仕組のちとゆーとアヤマ
キキスコスモササキハクツテテ

作者云本評の
内中は大陸三
戦の左側を
ひりてハ毛矛
の妙評也他
者の意裏小
説り其脇肝て
見立かねトア
いん是爲ハ
見立者中の
以ふそせの者
官の力が及ば
あらむ交審毒
舎の精詳を
高至妙あは
えれどもあ

ゆきえとて自えうつ其の敗もじるや博雅也安
の計策もてみ移あるを二にほど元すアアリ、則
等ハ前もて轉の末も仕役とアセムてゾアと
トテと召きテ有りハシムヨツラテ又別エ
さ外のアアベニハクジル十キユオラタキ
ての上なるバハニ燐破くの外て勿ミまのひえ
モトウの赤壁もまたあてもめーくん火攻の不
よハ別又ほのミ外もアレ明江を渡りて孫權と激
し鬪瑜會して掌中の合字より擅てさるぐ
きて皆赤壁一は火攻の仕組のめどもこれとあ

百千万言も
九歳余の岸
モ水陸三戦
の所要で書き
しよろん
クもも感空

あく緝定正諸侯を連のの大兵をあく毛矛
ハ右の人の討と豈まうりしてあく轉五冊ハ大手
ユソの仕組ミノ洲寺ノ少林の少林よからぬれ
狂の東良の義死増松の奇勇黄蓋を窮
らるる朝寧のき外ふと赤壁のかみ不よへあら
うけのぬあくさやかどりハ済事の殿ハ左轉モ
こそアムミコロヒナウムアムハシトカミロイシ
と務局ヤアのうも大戰の貫同國府事よく
うづぶべきももたと一緝くのアムモトモトアム
かすかトハクモムミシムハ活うきヌ餘のみア
スヘー

案本を乞古葉
見思狂お聖
大は奉かひて示
スヘー

とうぐと立えさんば深くめこゑなが立坑信
乃が報恩火猪の再出大猪の神異塚釣の厚
義音音が靈敵大角が成功ニ士の奇功南森志
子を助ける英靈定正が馬と奪ふの累戻はど素
外ハすもろん其奇其妙あざこひアシバいよく
あつく評ドアスバキモく深うらまかまわる
さるふれどそハ評中よしもあればみ下せくく
ヌハヤアジカムスルバ又初モトハたゞひてモ輯
モハ本輯が改まさりてやむひよあくまうんど
す輯も種々深めさるスミヨカズベおとづべ

又ふ六折下もととぞざくさんう今こそハ右よりふ
かきとハたゞひて左輯のくよんからくさく
て愈々愈々奇と圓扇もあしまほゝりふど
えを行司とかくもひまどくう事よまだのぎき

春花秋月

○一卷の内所附言と風服のよとをすつりてよ
ほじうふくちもとぞうづ脣もするよあくふる
てすあふかきをも例のゆく脣べきもとよど内
言よいづふう明説りうごうゆべくとあざこ風服て
やまとよなまくとすつりてよ片くちと

さうと暮れども、よくやうへやへて
 よりぬべしむのゆき原。ちよゝへ智慧と
 才幹とを論ぜられまつて、をそくは本
 章とをもとめ、さざて威服教説のすそみ
 やくよ別よろとくやべきさんと轉じて
 似而非書肆等がぞれこといきものあらま
 どもこゝみよけをうやうんとぞくめのとあび
 玉体今よもごとくよめくを感ひやう
 さしよ外をへりておなは後序のはうへと
 やるいやうよそくちう條後の半丁のせう
 いわゆれぬうる

まく戯文とよへあらでいきうちゆゑもあれど
 まづらふまづんぐらうくまことよきぬる
 又評中よあくやまことよ自ら自らを筆ちる
 感じてどもくまなどくやうすうてひあふ
 いわゆれぬうる

辛丑十月

篠齋

著作堂老先生

五事下

りとくとくとく
おとくともぐん
まかねてうち
人のをとあらわ
ゆうとせんとく
ゆうの出でをあ
えぬの出でを
りまわ。金明

筆つらぎと向へてまづくわろくにきよちんど
愈出愈奇と詰そのまハ字面のとすうと
山のまふくと訓とつせんよりよくびだりよ
くくてびくつよくいづりとくとびく又ハ
いよくいどくまくまく出のまいづるよ
う語とよからひとんあひとあんそく
高論と云ひ称ぐものぞ

犬傳九轉下帙下套之中拙評 百六十七回

○款爲大全等長尾を追ふよ俱教二もとじき(義通
もかさんとまきと辰相が云々諫むも)本意をあが
きをせんばれど(さて岡山又帰陣ちる辰相が云々ア
ミユ理言ハセラんと元より出陣ハ諫めいろきこられ
ど(義通志きらよつゆゑよやじこととねど)出陣ちる
をみて長尾よ難波あり今そ其歌をとどやぶれて
逃げと遙さんとさうむを發理言をつくして諫めども
用心のふうきとさうむ後見の老臣すらうか長尾よ
卫ひむとて危きよなづかふあきよ似ふどその危

きハ叔父大全の元のため又長尾の貫目めため
辰相ハ勇臣才をも智臣ニ長尾の勇もぐれどハ
ソヘシにさがの諫められどもやむことといざとお陣して
もとて強敵よ危うしご々智臣の智臣してとあ
今又諫めて歸陣してあの諫め首尾あつらせうござ
此危険ハ叔父が厚國大全が再出現義通が英武景
春が梶雄さかおそめのためすば辰相ハ輕けいふどろふも
又後見老臣ごじんのまろかくもくろさんざそあほよ貫
目とまくぞえも深くあの諫め前智ハりふまで
えくろよ諫めて歸陣右より如く老臣の用心

理言以老の貫目ハセヒトアリテ義通の歸陣の工合
コメセラフニ義通コモホシ追シテ又何シテかとテ追
シテ花さうセモドクアキマド著翁の鬼神不測おの
花を咲せらんシテ又自シテあくめシテまづシテアシシテと
もつゝ童大シテ英氏シテの元ハ父の義家シテまつひ弓箭
ヨテ又事シテアセシテありシテ為景義通シテどハ又向シテドシテレ
あまりよ強豪シテをそせハかつて人シテよシテめシテあくシテさ
さんシテぞとシテみシテ追シテとシテまシテてハあくシテ
いまほひとうで後見老臣の諫ほひふシテそシテの言
をのひて歸陣シテそめの人シテアヌえ何シテアヌなよ季

とまうえぬてあらざるあり諫と匁ひきらうとその
諫よてさざひと只自然のやうすみどそふみ
勇も何う智も何う義愛も何う温順も何うある
ざああざざい有やうとてかわう一さほどハ深うて
かりざるゝとて有べきせれどめ筆りしこと只自
れよ其ゆのほきよなうとてほくらめ○信乃現ハ
の安危いふが陣のちよひころのるの脱ります
きハツフまでをんど於精め感心く身内為景
ケ珍よ嗚呼うとおひい幸として窮屈とも
きてありうちよと意外とて有まべー／＼

豈ば管領方忠良の者の尤もとあれどそと其死
玉そよく忠良大々ハとあると蘇生して死ふ
ままで恩わいさんや里見方よ尤ハ書きぬまご
さんと死もキハあくど其死もハ降参の時衝村
翁こ姓をもまく但一これほど大合戦双方死傷
あぐまう里見方へうとて皆幸すよ右ベキとぞ
スあるとぞとくが然ハ結局ハ大士武勇の尤め
大合戦それ和平大團圓の奇發結城法會
開争の、大の令をもひつりましとせ大合戦よ并
さまもつて首ととと功とやび生捕とぞ

説小治政
卷首あらび

義成の仁念をあさせてさうと三折の大義と大能あ
つまでもとす名ある者ばかりづよれどえある
ともかく大きき嘆歎方ともとあるとセラキあがむ
いづゑく味方へつめくそめとぞかの双方と齊のそく
てハあくみ大然とこときよとた徳をきよ脣とく
とくう旅局をあの大奇然ニ十年前だもむび
かうじる版稿あぐくすとめく奇と妙ぢり
書上といなむけ又別もゆゑることとて著作の
うも自作より造化作者の意かくせんとむふす
じきハ咸一がモあう又むひの外よめくするも

あうとぞふふみハさうべきこときうひふと作者のかつて
ヨはまだきいよきひをぐーほーそふハ長編と脣
セテのうき盛り自作のあびます今た大念残よ
ちやくすとみの自作自作ハ本筋筆としてあらわる
ちやくす大念寄ハかくくと二十年未さむべと
かくじ一奇ぬ裏うてあぐくし奇とぞの作者
のかつて自作とぞかの小造化の自作のめくらうよこ
ぢづけかてつれをきさるうと妙に巧に新奇の感心
と感心せりせめとよちねなどうふうふうてつば
きあうぞ奥そとづゞまうすれども一つ二つひく

てまづあざ華のさくみよろこびいひきうねらひ
かづこむは奥のつがくよみのづくよつるま
あんう○親^{おや}義^{よし}を尾を追ひるゝ為^め亲^{おや}あんう
そちつとさくらん^{さくらん}の草^{くさ}伏^ふそえんとかま^{くま}
ろみ素^す一貫目親^{おや}義^{よし}あらばだく青^{あお}はの飛^とぶ
あやくま^{あや}どり^{どり}すくべ^べきあらばだく青^{あお}はの飛^とぶ
如^ごき^きあと^とを近く追ひあと^との工合^{くわい}さとく
あやう^う猪^{いの}一^{いつ}劫^{くわく}であれ^はうくよ^よあやまちしづぐ
あよど^のほの靈玉^{れいぎょく}の光^{ひかり}をねた^{ねた}うかるもあすまけ^け
ぬ景^{けい}春^{しゅん}と陰^{かげ}を含^むて一上二下男女年^{とし}とく

細^ほ評^ひ原^{はら}卷^う九^く
ちろん此^こ猶^う生^な捕^と矣^う弭^めと^ちめのめを教^きそあ
かくめをうしてあくすおぐ於^お親^{おや}義^{よし}勇^{いさ}氣^きをそ
いよくアヌ^{アヌ}景^{けい}春^{しゅん}破^はぐ生^な捕^とべ^べさ^さど破^は走^は
しるのミ^ミハ後^ご心^{こころ}服^{ふく}和平^{へいへい}よりたゞじ愛^{あい}子^こ男女年^{とし}
た^たま^まと^と軍^{ぐん}か^か景^{けい}春^{しゅん}と^と身^みさ^さて^と生^な捕^と系^く
せ^せん^んと^とう^うよ^よのめいふ^ふと^とよ^よも^もう^うと^とお^おめ^めこ^こ窮^{きゆう}山^{さん}
と^とめに^{めに}ド^くと^とう^うよ^よむ^むあ^あう^うと^と○俱^{とも}敵^{てき}
あ^あは^はお^おの^のと^とて^てま^まか^かあ^あなる^{なる}義^{よし}通^つ馬^まの^のも^もと^と
追^おそ^そん^んと^とそ^その^のは^はど^どす^すば^ば父^{ちち}の^の子^こほ^ほひ^ひと^とお^おぎ^ぎ
こ^こよ^よ辰^{ちゆん}相^あの^のさ^さづ^づよ^よう^う一^一千^{せん}あ^あま^まう^うと^とひ^ひま^まあ^あて^てた^たま^ま

末りあす精ぬうふゞぎうふ駕籠のけバニ其手
すのとあくあぐるべふが俱教ニモ駕籠よづソテ追ハ
シモヘシどみハ義道おもて先鋒さきと辰相義道を諫て
帰陣かきん又および先鋒俱教ニモ千とモテ駕籠の小勞
をたそかニシ。老臣おじのさづがふかゑかゑかよハ只
義道ぎだうとつまうて駕籠えいろうのみとモふ俱教ニモ
言セテそのさづごとソモアラルアラルまことノ籍
細ほそミナ感服又俱教ニモハリツビテ駕籠えいろう
きいモハひふきひふきがこそ多散さんモハ一千をつどかかモ
ふくらうしそつふことを籍じきふゆる寄舍きしや立壇ただん立

云こし又こうう一休いしゅまつままつまけり○記
清きよ孝駕籠えいろうがをるうてお十三大兵だいまつまふともコロ
駕え籠ろうをとまうびふう向むかんとそ馬ばとうあう
ひきうへ俱教ニ等とう來きゆるままそのうのううよよ
ひひ例れいのすふふ文ぶんの段だんぬささももゆやく
せとそそののおお会あ見みああ前ま悔くわいううててあれれどどくくそ
いいままごご言ごんををすすああののいいああににああだだををくく向むかいいかかる
ややああけけううぐぐりりどどほほががんん今いまそそののそそままいいとと而はし
凡おもななうう向むかううののいいああままととそそううののちちままいいとと而はし

化作と比興も
本意あらば

その御評定
ありふれども

凡作あらんよハその俱教ニのえとを争ひてくみすよ
脣くもあらんうそとせごとく向さんとそ馬とうわうる
と俱教ニ末見がかりゆまとまづすあきてこあとの
談じうるふとそきしてくよセモタマスとそへたまされ
くもておきあがさまとう向さんとやかひいきりん
そほとたうめで萬ものあざとひん作あぬとさう
まことよ感服すうう俱教ニとひく教ざうさんま
わらうん馬とうおりるあぐーそなまよあつて其す
を争ひてこそ孝廟事よ面後と孝廟事と向さんとわる
とくよ俱教ニあくみがえをもぐるとそひてます

とハそのゆき其あざとひいふぢや又俱教ニと孝廟等
の後話の後はあくまつてそめのうのゆどとべま
せんざかに遅參うとつがの言ふとあるよまとハ二头よほ
卫よおそくとあらうんあまとひきまくふくとけやと
あくまくあらうんのなまくしらえもくと俱教ニと
ふあひごへたもるきくら奇めへ感心也○多勢え
を益ふと皆うさんとつハおもが勇く俱教ニがえと
こうじうるべきことうそそでおもがえと五百をばくめ
うちをつぐも又ぬあらうふ寄舍五壇共の兵とも百三三
十人をうと併とうまをあらすも有べきなどつめ八陣と

あそんよハ古事記ナヘトモハアシギムシテナリテハヘズモ
タクシテ○就義キサムトナリアリテ經手ミテヒトニ高め
シテ走ラセヤス例メぬラキシムラキシモチヘシ安皮
ヒタカ取リシジケンシムルタクシムルおぞらアハシズ
ヨリナシジマシムドヒタカムフシルバグアタガトヒ就義開
シテおぞらのすけタラムツグドア著翁の筆ナリアリツブ
ナリアリソノハシテヒトヨアハシドフヒテヒタカミ
アヒタカ取リキムラムラアヒタカムスベシタカミ
モヒタカ取リトゼタスアヒタカムスベシタカミ
頃アヒタカムスヒタカムスベシタカミアヒタカムス

著翁の筆とあくシシジハセシテラフナリ評ヒシ
エハアシドサテ就義キサムトナリハアシドアハ
モヒタカムスヒタカムスベシタカミアヒタカムス
エテアヒタカムスヒタカムスベシタカミアヒタカムス
就義キサムトナリハアシドアヒタカムスベシタカミ
アヒタカムスヒタカムスベシタカミアヒタカムス
ラウタカムスヒタカムスベシタカミアヒタカムス
アヒタカムスヒタカムスベシタカミアヒタカムス
ベ一處モテ○就義キサムトナリハアヒタカムスベシ
ハ元ナシナシトナリ又阿摩ヨリツムニ文ムヒタカムス

うかうご花あく雨あれあくべーとハーレーのそろ
かくべくわのひもむきそくよそひのとあんくからん
くわかひそくまくまくすゆつてふお輯のわれまぶ
え外までこの難生めざういよくかうて皆意外
のひそくわひつくるあみくまーつを一人がう
ぞおれうて、さ外とて外いふも奇くぬときて
よくゆくばくこそ孝嗣等移ち川ようちふ
とんもむせんばそゆへくあくぞ水色ちぐく五十
三太寺ハみきの者うら知己ちきことよ其こう者
寺舟とうづてあらそみつぶくあくぞかくぐく今

こよアキハかふえんやくまくほうて動くぐくぬるか
芳流園上どろまろびかまく信乃於ハがゆくへまく
かまひはやまくぬくまくあくをそくよこまくつだ
遠く外のこちやくとそづくまろじに共ふぐ
さくもくおそりりりけ條事こぬくとつへあげ
りそんもくさんばたかーとみて大奇大氣もそん
いそくもくとそつせく、皆へぐ自れあうごるを、
左嗣義通の危険となきれて再出の大元さん
おきほよかうてのめすまの感ハお釋の評よ
そぞよひくらしやうよおどえく行こうおまゆ

見刀者

かまうてみえと又洲壽へむらをと國府をへる
しるなどとぞてことよつてつやう景春が軍立と
えうきよそてかの危険の傷よ出たのつぶめとふに
其智の要月もよくあまうな副入房のさへきく
とた大川はおもと不意よ別どくろそと下とけり
のふきの別どちくねど其身は太師のえくす
と告くもくたようやせてハあくねどそよるよ
こよえき明白をもんせぐつゝつゝれんとまうふ
攻團太が大田大川大坂三、これまへ言とつてあり

○五十三太素手吉あよ館山を代^{うる}早船^{きはんよう}の緊用をあー

えのひをびそそくとあひて落人と生捕の用と
あー又おふそ就き法會といぐの用をまーそひ
そびれ大用をあそいざくもあそびくことと大用^{ヨシ}を奇
めもづくれくもく法會ありとアんとてかのた大川
もじとさうのびりしまこととく奇めこよつてぶの自然
あるれ著翁のぬ筆めあじかの小送化中の靈珠^{ヨウジ}
伏姫のみびきと或ハ狐龍老嫗のたまくことあるしも
あべーさんどそそ文外冥助奥^{アカシ}がりあくやく
同忠は義氣^{ヨシキ}とそくひさんとれそく著翁のぬ
業そよそいざくもくと寄るみこ辛^{ハシ}三太結城の記を

この大外の精
詳作者の用
心をよく思
うち感服く

心をもておどもおどもとよるあつて後れんばと三人と
語さんと漕せんとくでんせんことくらふ賞を
べしと五十三太兄矣をひとうつづく地熱星
ありとばの筆上造化著翁もかまひの外みて
あるあんかぞうの地熱星熱湯の功をみてはふ
そくさんと秋香の館山ははるかひごくあるとげあら
おな春嗣よまうひて一トをくまき、鉢山の手意
とくわくうんおなはあくまくばすくじかくてぞ
地熱の先まちにいきまづくそんくよれまく
さいいふもねこ茶事件のみ不細工くさんよハモリ

そくちよバホムシヒムメヒキツモホーホア至
り○かの姫子三人走りうつむき長尾のまると告
るその言と地文と一つの唇もくる例あぐよめあ
所よもよめさるく感ひたり

百六十八回

○三個の夥兵等が告よ代四郎其外皆かくめんぢんぢ
孝嗣ハあゝ驚く色をく計議をつゝ又一段かくづ
さてお計議を放翁がせちあらもあゞ又おふとこう
ハからえん等ことをかくづの奇策とよもよ
ぞよバおとく有てよそよのやうすが孝嗣ハち

驚く色をままでそ軍議の席が發言までハセと
このわざもとくあざとひもそく奉嗣の用をし
おき居はまることあづくのと諸人ハがくめんとくよ
奉嗣も又あてをもつておもてをもめて軍議とある
こそ用あり度用あらばからんがおえとおもいがおうと
奇策とくとくをなすのりやーあざとひ萬とく老練
革のぬ感ひそんとくまつあべーおもて頭をかみせよ
とひめこゑの謙いわきひざふどゆくことうといめいあざ
とくとくハ埋伏といばあふめ奇兵ときらぐるやくハ

景春の憤怒の兵勢をみてハヤドリぐくせ
ろとさとと言とくせむう信友のあひじさるへとくば有
べくじとくとく右とくとくのきくよじくあめとく
あゆえよ正うとくとくとくの景春其機とくとく
えうひて發つて退うとくとくとく走う喜耶大喜
ハミかくとくとて敵の後陣をきこれといざあて其ち
へをかくえうとくとくとくとくとくとくとくとくとく
かく奇兵すとくとくとくとくとくとくとくとくとく
議こうきよあらど景春が憤兵をよそに必勝とうご
れバ神傳の陣をもつてひくかくとくとくとくとく

やあらうがひて退をもいざあて勝とさん憤
兵とへど八陣とさうひ退をもいづる軍のちあひと
ころはうそそそそそそそそそそそそそそそそ
ぞば人の奇兵と諦ども又みかにドモヤのところ
をあくろかのいまうかもぬつてふそをふも前もす
如くそとうそをふおきがかりところをせんと矣論どる
よほのびとくらんそれもひかすとくよ又自解し
て必ずとかの王者の軍をハ就處が正大本意を論ど
さう時軍士うてハスのみて謹とあるべきな勅がふ
とくろばとくら奇兵と主とてたうひざあて勝え

とまくするゆゑ云々諭じてそそりひどかの神傳の八陣
その陣法こそ奇妙あん奇兵もあんとて云ふとあく
敵陣法と効ぶごくの歎あう歎もアヌスジアキ陣と
かうてひかくこれ正大あんとせし必殺とあるがつが
ちんばとくらぎとくらぎと死門もよひんとて一人を
かくとすとて女神傳の奇兵陣と玉手してうぢう
すばやかの其陣に入らずて退をものころみて謀を
あそべまくとくらうとくらうやがれきほ陣の馬とうち
必殺とくらんとくらうかみそぞうほれーあがひま
いざるふの奇兵とハ同ドくぬあざとひありそと人の

奇兵ハ論じて吾まゝ大日小黒の奇兵をふくらと見
むハひが目こそう例のうぶちもあくねーかく自解せ
ほどあぶちの疑ハ咎もあよびてつぶすモ、スセギある
を於くごくく咎くるかくハいひづるもの前氣あゆ
あがえとくさんとよやとよんうみんちかつやうとさま
ざあよヤセキタマムジキナク發言一就奉るが
コ計策とぞあたなどからうひあらうひといめよ
かやうきなうきりきりかふとハうとうもます
あと眼癡うがくねきのみ口とて目とぞうござむ
シテうきつぐそーんとあらうりんハ人ううてもさんがよ

くちくくみバーンうがくと又又自解もーとてつくる
ニテうかくのめきとぞあれヤつうて矢ととくう
○就きあがくととくうとあさかくうとよ景植のるあよ
あくざらハまで自解ーひておのうじす明白あれハ
いきうちもその遺念をあくみてよほゞか候と清く
かくをすれて別はよむそくよわづよこよを教えら
キ玉者の軍の論外とこうのとすくよハめーと高
きをぎしろうのやうもあむとくらんと前釋の三八
の巻よ信乃にハが顯定の大軍よそじて射てると
こよ信乃が言よ王者の軍へあくで奇偶をあもる

かへれあははうの歎言はう其倫ルニシヤ、向ド其
外ヨ、大士シテマタモアムの言共カハアリスバシのと
ろそみおぬとまうはくをクモトサシテの言とあくセテ
くらきのモウの王者の軍キミの意ヒトナリモジタルヌ
犬士ケンシの本色ハラハラセツクシキの一つツアグアグ一〇八陣の奇
状シテミシ景春の眼アヅヤシムシテモ
ろん其陣アメニセキシムヤシモジタリアキシタリセキシムキのみ
て其奇アキの、头アヘと眉アメとざらとまう正大華アシタハ奇アキ及アシタシ絶アツ
正大アシタハの、こあアシタハにかの結城アシタハの石塔アシタハと同アシタシく、夷アシタシ状シテと眉アメ見
ざるゆゑ其奇アキシカくとまうざりアシタシ奇アキめアシタシ演義アシタシ三国

志シテの諸葛アシタシハ陣アメニ其奇アキ状シテアツシテモ著アシタシ爲アシタシの
妙筆アシタシにて、眉アメとあごアシタシとよさこそ面白アシタシきるも、
セキシムキアシタシど彼方アシタシの軍記アシタシ小説アシタシ、彼方アシタシの如アシタシき奇アキ陣アメニ
眉アメとあごアシタシとよさこそ面白アシタシきるも、
がせんアシタシてえども作りわ法アシタシりふアシタシばまろとお奇アキと眉アメ見
やふアシタシれアシタシとそまほアシタシどみるあアシタシぐまアシタシと狂アシタシくの
よへからアシタシと眉アメとぞ前アシタシの評アシタシモシひアシタシらめく寂アシタシか
ハアシタシとまほアシタシ伏姫アシタシの神異冥冥アシタシ即アシタシハタタクアシタシと其身アシタシハウアシタシ
漢國アシタシの仙童アシタシ術士アシタシの如アシタシきユハあアシタシいざアシタシところとアシタシき
やうアシタシ音アシタシたゞアシタシて有アシタシもバアシタシとこアシタシもそアシタシの神傳アシタシ

陣の奇と云ひて其をもてハアセられて本傳中の一奇元
ニハ召モアラシニヤド取ミ奉其奇とあヒトモハ召モ
さ用ヒシキニヤ深ニヤシヤ狂取ミ奉ヘヨカナカシビ
神佛靈験の外ニ夏幻奇異のみと人のうへ召
スルモト一ノ多く召シシ方ハ朝夷巡島記の凶賊
修羅冠者矢藤立等ニ用心正大前ニテ區服ヒテ
又モヨ感心國服ヲアムラセヒテスのゆりすミ深ミ
奇め奇絶何ヒヤヒツヨミ半軍ニユ鎌木重^{支那}キモ
ハ陣と云キモシテ豊太閼^{日本}の羽柴^{日本}筑城^{日本}シヒト若
シメモト竹中重治^{日本}が救ひ出モ召スレモシテ合せ

奸作也
トシテナリ

シテシミハヤスニシニ真アシドシシトシニヨ高懸雲
壊シテハヤシモチクシビシテシテモシテ威シモ
○景春ハ陣をアテテシミ計アシテゾシテ引シシガ
カシシヌミ者^{シテ}カミベー^{シテ}アシド^{シテ}カミ^{シテ}鼻^{シテ}
コエシテモハダ^{シテ}カシシガ^{シテ}計アシテゾシテ引シシガ
アシド^{シテ}カミ^{シテ}鼻^{シテ}シテシテシテシテシテシテシテシテシテ
アシド^{シテ}計アシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ
カナシムアシバシアシヤシモ^{シテ}シテシテシテシテシテシテシテシテ
シモシテモシテモシテモシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ
シテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

東國一個の英雄ひきよへさうと真裏まじかうこめうと召めしき又
あふる爲ため景春が捕つからはれて、だりうごめまつとみ
しふと又またあるあるとも唇くちびること一個いつ勇
武いんぶの將雅まさああざわらわくよさうをかづく又醜態しゆたい
唇くちびることああそうよ奉傳ほうてんハ里見さとみと主おもとて
正たださむちろこすばきふほかくよかくよのハ皆みな邪惡やうにと
せらみくら長尾ながお父子ふし奸邪けんぜよあくひども仇むかして義通ぎど
を走はしくややほどすく行ゆまやよかとくらまてハ敵役てきえき
せふせふばばああけの勧説けんせつ、かくくああべきことくらまう
巨おほ田た助友すけゆハせほすのすはりやああざやまづまづを務む

までさうすてぬぬそを敵方かかとと忠正ちゆうせいの士しえう
主家しゆけとと護まるの三里さんり元もとを奪だつふの邪計けいきハあさを筆
誅しゆああべままととるそー長尾ながお父子ふしハあななの主謀しゆりくこそあ
揆く會くわいよ無むい奪だつそんそんととるの意いふれみ一個いつの戰國せんこく英雄
の取とり爲めととはつつと正ただすととひいいぐぐかかきき奉傳ほうてんの奉傳ほうてん
くるよハ筆誅しゆしゆままねううねねこころろんんう○景春けいしゅん辛
三太さんた寺てらがああふふぐぐりりとと參さんりりててぞ期ときよよううぞぞとかかて
うちうちくくいいととかかくくととうう一いととへへぞぞああざざああねねよ
までまでととききるるふふぞぞううととああざざいいの深ふかききめめここす
○孝嗣こうし景春けいしゅんを防まぎまととううそそてて花はなををええ十じくくももどど

云ふと有名のやのとうちとるそれどこもよ縦代とさつめ
く例のを配精のみあが首とねらざる又奉嗣と合
そ精と於後段のつぶきあり馬とを捕奉嗣が朱馬
をのちそんとす用ひるをあづまとせとまう首とシテぞ
馬とを捕さるあくまのりあうとあうと代田郎其外等
と白じくぬれ奉嗣とからまつていざとこもよ馬とひて
そあらとハあのづくよ一ノ月つきしるこもよ縦の月めと
つゞくゆ○景春がこの退^{ハシマリ}にち^{ハシマリ}進^{ハシマリ}もすとふ
さそくまごちづのハ景澄^{ハシマリ}ひまむて馬とうちまくセ
後ハ景春景澄とをみじてうつとも於勝^{ハシマリ}いざくん

をあひひそめとつままであひ馬と走らせ森へやる
大將の危き場忠臣死よかまうて森^{ハシマリ}間^{ハシマリ}かく^{ハシマリ}太陽と
のがるをす賢愚^{ハシマリ}善悪^{ハシマリ}皆^{ハシマリ}みのまこととくもみのまほり
のこすすめどもじかく^{ハシマリ}して何とまく^{ハシマリ}どこまく^{ハシマリ}よ無雄^{ハシマリ}
さゑあるうてかのたを逃^{ハシマリ}うぞくよしのくとくう
かく^{ハシマリ}二秋^{ハシマリ}行^{ハシマリ}五九郎^{ハシマリ}れそけ^{ハシマリ}てどあうぐく二人
とひま^{ハシマリ}もづ^{ハシマリ}逃^{ハシマリ}うとおきの^{ハシマリ}が^{ハシマリ}とてかとくあく
みきとをあれ村野^{ハシマリ}をふ追^{ハシマリ}、あう後^{ハシマリ}は^{ハシマリ}奇事の
なれり^{ハシマリ}と^{ハシマリ}は^{ハシマリ}誰^{ハシマリ}か^{ハシマリ}べき例^{ハシマリ}不^{ハシマリ}ぐ^{ハシマリ}む^{ハシマリ}と^{ハシマリ}ぐ^{ハシマリ}ひ
奇め^{ハシマリ}こそ^{ハシマリ}め^{ハシマリ}こそ^{ハシマリ}景春^{ハシマリ}を^{ハシマリ}逃^{ハシマリ}うやう人^{ハシマリ}と^{ハシマリ}え

か二人就禽すほどもさうぞ敵もあらぬやうなと景澄
がふせぎて景春とうよげしくいひまじめうあり
さうども名あらま敵ともとまじへてよふふと
さうよ其敵のよぐと追ゆきて有べまうとま
おのひきどりうさうある三三ろみがさうふとふくみ
しきもとすととなく追ふべきるし狂まうむとそく
遠くおひるかの一奇をえのあらびけのゆゑもあら
かくは其えどもまくわうなどあまつゝ根拠ルガタニ
たうぞするさくらば理屈のこゝも廢ハシマづばん
このおぬごまひくまく奇めこ奇め○まく

ぐう二つよこうて信乃現ハ等の顯定よ然前緝のつ
まみとこうの昏が一まくくぬこお緝岡山への酒進よ勝敗
いまさきまどかうる大勢あらば駆於危ーと告くらハ
その三三のあらじも有ぢんどうふよういあらまく強く
然とその昏み地理といひ大士よびこそ破れんがしてあ
うるまで雌雄とこうて殊そひのまほひほよく寄くれば
ひきまくするほりるる火とそてておまきひからくとこ
ぶるもつうくまうそむつうきこころへ意外の奇あは
えむつうきと真のひつうきこころへ大士の武勇まさ
まげあくとくさんばひつうきこころへつまざとあらうとん

とかまくとまづまうと先火魂との戦うてそ
うと後めき外の一あそとけんとしよくと外
のやの奇ナガをうちかへるゝにまろかへて與賊軍
よりびまことよ奇め手絶ハシメテさきよはあらの火
猪アヒやざれままでハヌコアマラ火をせんとがわ
をまみきよまび大敗よりびうち被ハタハタ反討の奇め
案信乃よまび火猪を敵をやあともいりつを一
衆又ハ百ハ人をも度く及びて有り無めさても
いひくちの火猪アヒの火猪アヒと外討一敗ハタハタ奇ナガむるよ
の火猪アヒ再アヒあと意外の又き外アヒ一役ハタハタお猪アヒお猪アヒの脣アヒ

あかこぎりアカコギリハあざぐくアザグクいづれ何ハナムとハナマア
あんとまでハめひもあんアヒと再アヒ再アヒ奇ナガからんと
さかとすねサカトスネとくべきトクベキニミツニミツハ記ハシメそだ
かへこまカヘコマとくまと乗モダクよけ投ハタハタんがん其猛アヒ者アヒと
唇アヒのこまカヘコマと走ハシメまかうとゆきヨシかわカハととま
すと唇アヒとぞカヘてほす信ハシメらハシメのとくづらカヘよこま
くの深アヒの深アヒ誰アヒも唇アヒいん狹狭アヒとめとこまよ早く
いふげアヒふアヒ又アヒ大猪アヒの大奇ナガそこまアヒと
ハあざアヒひとよそとてアヒとすとすとアヒとすとアヒと
ト知アヒとけちよ乱アヒ三面アヒ福華アヒ相アヒすのやすらぎよ

蜀坂ハタケ井波ハタケイハ龍頭蛇尾リョウトウサエの一巻イツモンも又アリかる先
一子大猪オシノニシキと名メイる中ナカニのあらゆるへ老練妙筆オジンメイボクあり
でハあぐれアグレ○寛安房カハシマ逃アハスと云アヒテうて覺悟カクガのけあぐ
ハ朝良チヨラが小文コムニ五ゴむうそんムーンとやト向アヒテぐとんトがよ悔カミ
種ヒメつアヒテあくアヒテぞアヒテちといきアヒテみ賞アヒテ詞アヒテもとく於
驕奢カハサ慘弱カハサを召アハスくるこアヒテの長尾ナガテ内ナカニト華誅カハヅま
邪カハサとゆアヒテさんアヒテざアヒテさアヒテ二ニなアヒテすアヒテるアヒテ口アヒテドアヒテーアヒテ口アヒテト
うアヒテまアヒテハアヒテりアヒテよアヒテまアヒテとアヒテきアヒテんアヒテどアヒテおアヒテぬアヒテ○大豬成氏オシノニシキノミコトとひ
まアヒテけアヒテくアヒテいよアヒテ意アヒテ外アヒテの大アヒテ奇アヒテ歎アヒテが必死アヒテの采アヒテ取アヒテ

かアヒテ在アヒテ村アヒテよ弄アヒテせアヒテれアヒテ一恩アヒテハ恩アヒテせアヒテどアヒテとアヒテとアヒテハ太アヒテうアヒテとアヒテが
よ家アヒテ柄アヒテ又アヒテくアヒテうアヒテそアヒテおアヒテ量アヒテとアヒテそアヒテんアヒテとアヒテ召アヒテくアヒテだアヒテき
しろアヒテうアヒテあアヒテくアヒテざアヒテくアヒテそアヒテのアヒテ殊アヒテめアヒテもアヒテくアヒテとアヒテ口アヒテドアヒテうアヒテば召アヒテすアヒテよアヒテ文アヒテ中アヒテよアヒテひアヒテづアヒテくアヒテそアヒテのアヒテ將アヒテそアヒテのアヒテ徒アヒテ士アヒテのアヒテうアヒテ量アヒテさアヒテへアヒテよ
スアヒテあアヒテあアヒテんアヒテ成アヒテ氏アヒテ豬アヒテよアヒテひアヒテきアヒテうアヒテかアヒテうアヒテくアヒテうアヒテもアヒテうアヒテよ
ウアヒテのアヒテ家アヒテ柄アヒテみアヒテうアヒテどアヒテ神アヒテ異アヒテとアヒテひアヒテことアヒテよアヒテは深アヒテとアヒテゆアヒテこアヒテまアヒテまアヒテもアヒテまアヒテのアヒテ家アヒテ柄アヒテみアヒテうアヒテとアヒテ召アヒテきアヒテ一アヒテとアヒテろアヒテえアヒテそアヒテのアヒテ深アヒテぬアヒテすアヒテでのアヒテよアヒテぞアヒテとアヒテさアヒテそアヒテがアヒテよアヒテは氏アヒテあアヒテとアヒテ里アヒテんアヒテのアヒテ士アヒテしアヒテわアヒテよアヒテ組アヒテ伏アヒテセアヒテてアヒテ生アヒテ捕アヒテよアヒテせアヒテんアヒテいアヒテくアヒテのアヒテ身アヒテあアヒテみアヒテ自アヒテ胤アヒテまアヒテ里アヒテんアヒテのアヒテ士アヒテがアヒテ捕アヒテうアヒテ國アヒテ目アヒテのアヒテ激アヒテ烈アヒテをアヒテ身アヒテあアヒテみアヒテ自アヒテ胤アヒテまアヒテ里アヒテんアヒテのアヒテ士アヒテがアヒテ

おまきかくあそび自畫自演トシ
ユセキシテアサツテア成氏於テアダーユ用ひせびて深く
トシ倫ニ快ニ帆大夫が行徳ヤんモ私モアモド信
乃が仇於ことハ房ハが當の敵モヒツベーモル
旧怨モヒツベーモル又倫母の事モモヤウ帆更が
在村が御賢慮モ同士でねどもモ如モシトマ
スルモ從来モジヘテヒテモ、要モ助けんほど
カムモシトモテモ罰箭との格モヤツモアム不
明白トナリ○およせり小文書が旧恩の筆モアミテ

信乃が旧怨の箭射してやうと矢をう一たる事モ信乃が
今迄モテヤニ怨モ一時ヨクモモ例のお止め寺め奇
絶ハキモモソドモ老も達モハアモんどうるふく
むくぬあめのうよとさほえそろよこもくまづるよ
もあくゞみハ卷タリトモモレモモモモモモモモモ
であるよとまよとまよとまよとまよとまよとまよ
細カクモ血つきの縁ほらのみの八字モナモアモ
ぬトモタおのそままでハシモアシヤタクモカムヒ
モく筋以テうれ怨モ筋モうんハアモテ腹稿やうごんモマダ
重モリんまたモスルヤ房ハの最期モ誓言と云

そうするのあくまでもうとかよくひ久人ハ夏虫
の水とあまびてえうひかくとくとく近くな在村
死瑞アリとぞ於馬上よ走ゆハてつらが首とくへど
もしてハラシメヒ黒民等ヨリとれてるやうが壁耻し
よいよ細あう精あうこそ枝葉よおまめ根本え
在村走きのうと強うふとうて追ゆくが底そも
ゆみの轟今ひれまが二敵を追つかことひ今在
おと進ニ信乃といひゆの何事がさかうひくるふまひ
のミラヌあくまみおのの夫人よあんと造化小兒た
てとよへよじ深く奇くめしよみりそわが

日怒うち回恩をひまよづけあまくみせうあそ
めぬ巧自立筆感ふく感服すう○穴へぞくも
意外どきうる誰もみまわらでと巻と捨るべ一信乃
其一騎の紋章は似まとひうるくよろび声どうぞ
さるのをあると駆よせ景慶を罵りつめてえ
せとみのようがくにて其人其の其のまほひエ
て紙上もあうて見しがめー信乃兩敵をさへとくまで
死活とすとあま坑^あのぞみてえと西三声絃をあや
さくらさんとま至極の便せらよむひまや於もの
奇め便白氣^きと馬上をぐのせりか一ハ又意外ど

スラ誰もみよよこぞりきよもあめとどスミ卷しよとをま
リテ立たよづべーせ土元^{タケル}趙雲^{タケイ}と寺めよ眉つくられ
しるかううまはりよとよふよとぞ

百六十九回

○信乃が就を辭^{ハシ}て先向ひさて告つゝ事^{ハシ}
言^{ハシ}至誠^{ハシ}あらざる^{ハシ}事^{ハシ}めりやく、お評又何をうふ^{ハシ}
いひー云葉の雨露^{ハシ}あーがじとおひー云時^{ハシ}
かとおひく、さうその^{ハシ}はなじまびの^{ハシ}くわしていとふく
くとおほし乍^{ハシ}れぬくちがひを^{ハシ}くるをや結局まみ
此合戦^{ハシ}記^{ハシ}扁^{ハシ}ハ景^{ハシ}すう^{ハシ}モ^{ハシ}れど^{ハシ}そが^{ハシ}事^{ハシ}てや能^{ハシ}

圓^{ハシ}エ^{ハシ}ま^{ハシ}あん^{ハシ}と^{ハシ}も^{ハシ}て^{ハシ}サ^{ハシ}ど^{ハシ}お^{ハシ}も^{ハシ}い^{ハシ}ま^{ハシ}と^{ハシ}、四^{ハシ}
ま^{ハシ}する^{ハシ}と^{ハシ}一^{ハシ}ぎ^{ハシ}の^{ハシ}度^{ハシ}会^{ハシ}あ^{ハシ}せて^{ハシ}お^{ハシ}言^{ハシ}を^{ハシ}ま^{ハシ}く^{ハシ}あ^{ハシ}び^{ハシ}
い^{ハシ}ま^{ハシ}る^{ハシ}あ^{ハシ}く^{ハシ}作^{ハシ}あ^{ハシ}く^{ハシ}め^{ハシ}あ^{ハシ}か^{ハシ}と^{ハシ}度^{ハシ}会^{ハシ}て^{ハシ}今朝^{ハシ}
ト^{ハシ}え^{ハシ}本^{ハシ}よ^{ハシ}た^{ハシ}じ^{ハシ}青^{ハシ}は^{ハシ}と^{ハシ}い^{ハシ}よ^{ハシ}義^{ハシ}通^{ハシ}の^{ハシ}危^{ハシ}難^{ハシ}を^{ハシ}
た^{ハシ}ま^{ハシ}け^{ハシ}長^{ハシ}尾^{ハシ}を^{ハシ}破^{ハシ}り^{ハシ}し^{ハシ}る^{ハシ}老^{ハシ}弱^{ハシ}が^{ハシ}る^{ハシ}ね^{ハシ}ど^{ハシ}の^{ハシ}あ^{ハシ}用^{ハシ}の^{ハシ}日^{ハシ}除^{ハシ}
を^{ハシ}の^{ハシ}い^{ハシ}ひ^{ハシ}て^{ハシ}於^{ハシ}る^{ハシ}ハ^{ハシ}あ^{ハシ}こ^{ハシ}と^{ハシ}ね^{ハシ}除^{ハシ}ひ^{ハシ}あ^{ハシ}ふ^{ハシ}る^{ハシ}
信乃^{ハシ}が^{ハシ}其^{ハシ}言^{ハシ}を^{ハシ}義^{ハシ}通^{ハシ}の^{ハシ}出^{ハシ}陣^{ハシ}と^{ハシ}下^{ハシ}て^{ハシ}知^{ハシ}つ^{ハシ}る^{ハシ}が^{ハシ}ふ^{ハシ}
今^{ハシ}の^{ハシ}そ^{ハシ}べ^{ハシ}ま^{ハシ}軍^{ハシ}中^{ハシ}さ^{ハシ}と^{ハシ}が^{ハシ}ま^{ハシ}す^{ハシ}や^{ハシ}る^{ハシ}ふ^{ハシ}と^{ハシ}せ^{ハシ}る^{ハシ}
ま^{ハシ}あ^{ハシ}な^{ハシ}や^{ハシ}れ^{ハシ}ど^{ハシ}お^{ハシ}の^{ハシ}諸^{ハシ}次^{ハシ}の^{ハシ}と^{ハシ}今^{ハシ}と^{ハシ}ひ^{ハシ}ぐ^{ハシ}
か^{ハシ}て^{ハシ}眼^{ハシ}と^{ハシ}と^{ハシ}れて^{ハシ}其^{ハシ}精^{ハシ}神^{ハシ}心^{ハシ}犯^{ハシ}ハ^{ハシ}景^{ハシ}あ^{ハシ}ひ^{ハシ}信乃^{ハシ}

先主を殺す精
西岸見乃者
至るか

徒兵と云ふことをつどひまでさんみのわ清よ力がござり
くる多義會すめうろへ取ハがえを信乃がえとれんへ取ハ
信乃は信乃のそとスモ人モ言ひと今月のあよ又年まだ
取ハが信乃が在村帆を又と射しるとよろこびてえみ
言とかうそかのさうと人をひまかくばよせ者におの跡と
よくえぐなとすまざる者著翁とあざざしてえまきう
そいひりんハかまくろくまくもふくともぬれんま車
ことまうも轟きあふとありハ駆走くうとある
てあれ、こまかにあらうあ、お評と憚むがでひくす
きく茅玉まうせと唇ちくと口とことまとつてあること

ありうし○信乃が誓言報恩のむまびのせ奇ぬ
奇能ハあまふうとあかくと多言せべきよあくせんと
何んの癖とて其癖といを語りてハ何とあん感トシテ
ふ地のやくゆゑ來ヤシ此ひてびのためよハいづれも詫
ふ危ふかよびのうきてハあくじかに輯を唇きくらう
のあくがみの脇稿ハいづれあくじんハ輯の上巻莊介小文
吾ヶ津衛ヨ三禽の誓言ニハ言ふことまでよあよびて
ハあくに其むとびきてハあくに信乃が誓言セ其號び
をくふすがえもんもど其誓言セよもゝるの言ふ
あくにかのまう誰もうすがえよあくじまほひ

ところこすばかく他作あらんよ其もさびの有事を
きりそつべきもあらざるもんじ著翁うしてハモでよまう
一人うふぐめくわろんへんと目をうけた意とくめ
りづくこそほだくあらんとおかるてわきもくちびハキこと
をぞ其傷のゆうのみと召えびきうそおちびハキこと
をやく二十年あかのとうよほくやめ取扱のさだめ
有りんほどいとぞすまうあれど編上一小送化る
千えみあ化のれきと召えよなびていふと壽海中
の一危と召えぞう信乃ゲむまびの二危ハいふもひろ
かーきやの何やこゝ召えよめ案あらんやといとゆく

うつあゆくみどももそよあやぶらもかひ居うしゆ
越雲奪胎換骨のせ大意外の大奇めまことよ風服
かんふくこ信乃エウヒテハ誓言すまく立候うしてハ
危ハやうん危なんとかかつて崎の危とハ幸大よ
黒うていきうニ危かきするのさうごそー神助
靈玉もあらはよハ唇とまくは又ウリココモトうご
すのをうじとお四くそそそうそくあざひらう
さておもそびニ千年おぬまよハ外よ一毫もあらまよ
せあバ信乃がもまびの危ハかくくとあらやドウニテ重よ
さだめをヨーラリんとスムハ今よもじうびあら

この股稿の廣大無窮^{アシカク}まことよ心もとて感ひ
又の千萬化^{アシカツ}してその股稿ハ、うす、あんお爲^{アヒテ}
を胥^{アシ}よかの赤子崎と胥^{アシ}りてふが轉^{アシカツ}あまうて今
云々ぬ奇絕^{アシカツ}と胥^{アシ}りて走^{アシカツ}は又其股稿
の敷金^{アシカツ}評^{アシカツ}やううな^{アシカツ}衆^{アシカツ}も
也^{アシカツ}花葉落葉^{アシカツ}いふもあり^{アシカツ}を
ひらそが^{アシカツ}云^{アシカツ}
勇^{アシカツ}はう
あふ評^{アシカツ}一^{アシカツ}也^{アシカツ}

この股稿の廣大無窮^{アシカク}まことよ心もとて感ひ
又の千萬化^{アシカツ}してその股稿ハ、うす、あんお爲^{アヒテ}
を胥^{アシ}よかの赤子崎と胥^{アシ}りてふが轉^{アシカツ}あまうて今
云々ぬ奇絕^{アシカツ}と胥^{アシ}りて走^{アシカツ}は又其股稿
の敷金^{アシカツ}評^{アシカツ}やううな^{アシカツ}衆^{アシカツ}も
也^{アシカツ}花葉落葉^{アシカツ}いふもあり^{アシカツ}を
ひらそが^{アシカツ}云^{アシカツ}
勇^{アシカツ}はう
あふ評^{アシカツ}一^{アシカツ}也^{アシカツ}

の國の條の頭^{アシカツ}はお國今^{アシカツ}キ^{アシカツ}より、後回^{アシカツ}とこと
うるあるうちた地理のうりの事とさへもこうろ
よとのぞくしよめお全^{アシカツ}よあんとしまく面白し
あふ底^{アシカツ}ふかせ立^{アシカツ}ておふあくやと胥^{アシカツ}りうがくま^{アシカツ}を胥^{アシカツ}
うも^{アシカツ}下^{アシカツ}ふかふよ文明の國底^{アシカツ}不^{アシカツ}野^{アシカツ}ともよまく
うれ^{アシカツ}凸凹^{アシカツ}をあして跡^{アシカツ}をせんめうの教令^{アシカツ}も
教令^{アシカツ}もくめううるお少^{アシカツ}せんど其めハ大^{アシカツ}すの
めとニぬあくとやめ^{アシカツ}○おほよつうておもあよ
あよおもおも寺^{アシカツ}がよ長^{アシカツ}底^{アシカツ}ニ^{アシカツ}の聲^{アシカツ}のすねどと譲^{アシカツ}
信^{アシカツ}ア馬^{アシカツ}のすな^{アシカツ}とふ文^{アシカツ}にのむや^{アシカツ}ハ^{アシカツ}もん実^{アシカツ}よか

あくにふみの詰廻がくすぐきよこく一
れハ孝来
つどひておもはる京をすととよやくとぞとくう
わくも便わらつとくよ一○信乃がまわんごほる
までさあくべかすあざとてかの大刀をひじてあるの
こころのをよきのあくびからむとを金とゆうがく
やううう大寺ちづるお旅行がおもながゆくとま
つとおれまうがお鷹と謝るよ言ねど、言おうとど
あくつやうへ信乃がまのまこと其大刀と佩え
居つてす情義のうもつゝとせとみゆかるい傳習
あほくねくよくとかくまでほくはすで、立つまとい

つゞとひ奇めよ、今さらおおえ信乃が大刀をあ
うちあづう測壽の陣よそひをべきひる、おまよそ
あくべきえをよひぬど、生れとあくまを我傷までおあべ
きくもあくぞ又おもあちゆく、稻村源のことをくべ
翁令翁のやうとすあくべ測壽の本陣よ駆つてくべ
お熱湯へまごとおわきひもくぐまるたよじやうだ
るるもあくぞ、かくが信乃のめぢぐら大刀ハれハが、
さうとおもひもくとくとくあるとつの情義こそ
こそ佩刀のおほきとくとくを佩えてあくまつては
もくろのかくとくとくとくとくとくとくとくとく

さうとハア子もひそめ作業をするハアセラ大事
トモあくびれど其妙又かソハ大こヨミ、シカリ、威也
次ハガ大角の大刀ハア、ゆもち又おこす便のすと見ひが
コモアムレキミニ大がみ因縁ありゆをあんとハアセラ
トモアムレキミニ大がみ因縁ありゆをあんとハアセラ
サヒーと云ふはげんふほんこんハ、いふ召るよさんと
うきるすとあつとも著翁は、するりいうで、あんが
かこののすうと云ふは、又云わぬやうむすぶゆふ
ち、あくまでもうかうかすうとあらわし、一すすんで
考へあぐ著翁おとづがーこそハアセラみ因縁ちゆ

あれであう脅迫へとねまえおちたれてこまよせ
き、あくまでもうかうかすうと云ふは、自立めことづ
おきなが大角の大刀の代御を、いわゆるゆゑどと向てと信がお
ききてそよがりをうかとみう義をす、又其餘りも
恩家の腰を、やえざるを、ハアのどとそと御無事
なぐ秘策ハ、於私へと用ひかれてこじゆを手
取る所、今いきまく、さきもせどもほども、あくま
もおむかへて、よ告げまうといふも信力こさせた
うして取ハと見えうけの大刀と、因、詔（を）、號（（を））、のうん
あくまよいかと、ハアセラ著翁は、ほよ又せども

のちの事
詳例のうな
玉手のてに詳
風吹の山神史の岸
出でてはる書
か

アラハハスムナガビシロタメユタメヒトトモ
ホムヒタヌダケコモトドムナツモセヨシシギメ
便ヒミチニ又理ヒモソシスモ故ニナハ伯父ヒシトマサ
ヨシタクヒテナヒト信乃ヨナムニカレヒトバ大角
ノヒシゲ取ハヨヒセシヒトハカルタキナフスルヘタ
ヒトナムテ後ヨアキモラムンヨウムテヨウム事ツ
セウシテナムグレハジムヨシタミタミタミタミタ
フキヒタナバサルトヤミハムシル取ハセシ
ヒツヨリナヨ声モモヤウ精ムヒ一言半ウシ打ム
キシムシムツキキナヒトハアハジムス大刀ム

ミムラニシテ代官茅毛ニ又春嗣等の割額え
くみハ政事とたゞひまつてハ等が信方を
アモテヒト日ドキヒアヒヒヨリヒトスミシテ
ミシテナムヒト日ドキヒアヒヒヨリヒトスミシテ
場ヒトヒムシムテ文はめするハセシルヒトド
クアヒテユ会トハ等者も斯方セ方のを亟ヒアヒ
ヒズムシムテモモドキヒトアヒヒムシルヒトス
あざくよシモ御寺の義功ヒヤキスアヒムシスモ
いよシアヒトモシトハ○葛西二御藩の村長
百姓等が在村帆大夫ヒ首をおまきスアヒムシスモ

さうとハぬこ里乙の仁政ヨリ前まで其軍をなまけたる
らまくかくのめきあくあく扇谷の馬も人との雪隠のた
ケひあると云ふ也アラフベニ郷が藩ハ後のあとあユ乃は
して召セシムアリソトモ一ツの山凹をじのアマカシケル
後之譲キテシテモアリソトモ一ツの山凹をじのアマカシケル
ちの感レドシビダクシテ村長等ヨリソシミカズ
シモ社番ミシ信内ヲシカズシテ穴の深きをかね
シモシホガシシモテカツヤアキアリカヤシシモテソシ
アリのあくあくぬあヨリアシメく神助の奇能イシテほく
信乃がシミヨアリソハマテヤシ御正統アリシカツメ

シモ凱陣の後シテ又召セシムアリソシモハ自を
シモベキセンドコシヨシシ村長等がナシテシテ令セリ
シモソニ軍をねまつシテソシテ仁政のアトヤシキニモア
信乃旧怨セシテ射るとハソニ首ハラシゲタバシモ
セカシハシモアリソシモアリソシモアリソシモ
シモハ農民ニ首をシモアシキの結果モシムニシメアリ
シモチ村長等ナリソシモアリソシモアリソシモアリ
シモアリソシモアリソシモアリソシモアリソシモア
シモアリソシモアリソシモアリソシモアリソシモア

しもめ文殊筆今まくよつべきよあるどねづん
ぬじ雲玉筆^筆をもてて能^能ハ其元への便行つぶと
おほきうそとあんばあさきやほくはまでつくや
つづよ○穴理のめ論と信^釋_{ナガヤ}^{初行}ハ等^{ハシマ}直え遠
友よほう勞感佩^{モモカシ}をか信ハ^{ハシマ}あぐまとふと稿
よあやまん^{シラ}或ハ筆^{ハシマ}のあやまひら先^{ヨコ}もろん
て誤筆誤刀^{ハシマ}とヤ^{ハシマ}もろん^{ハシマ}つ^{ハシマ}で今もろん
るキ^{ハシマ}筆^{ハシマ}つ^{ハシマ}でよろよ^{ハシマ}てヤ^{ハシマ}○取^{ハシマ}ハ^{ハシマ}おもよ敵
射方^{ハシマ}の亡^{ハシマ}體^{ハシマ}と便宜^{ハシマ}の寺^{ハシマ}後^{ハシマ}づ^{ハシマ}き^{ハシマ}と^{ハシマ}小文^{ハシマ}
ケヤ^{ハシマ}と今^{ハシマ}かく^{ハシマ}と^{ハシマ}賢將良主^{ハシマ}の本^{ハシマ}

色^{ハシマ}すそハ^{ハシマ}筆^{ハシマ}が^{ハシマ}と^{ハシマ}ハ^{ハシマ}又^{ハシマ}格別^{ハシマ}と例^{ハシマ}の筆^{ハシマ}が^{ハシマ}名
よか^{ハシマ}に^{ハシマ}字^{ハシマ}雲玉^{ハシマ}のに^{ハシマ}よ^{ハシマ}と^{ハシマ}て義成^{ハシマ}のに^{ハシマ}今^{ハシマ}と
今^{ハシマ}そ一大奇^{ハシマ}に^{ハシマ}更外^{ハシマ}の奇^{ハシマ}に^{ハシマ}め^{ハシマ}そ^{ハシマ}よ^{ハシマ}り^{ハシマ}す
そ^{ハシマ}大合戰^{ハシマ}が^{ハシマ}大^{ハシマ}筆^{ハシマ}あめ^{ハシマ}わ^{ハシマ}と^{ハシマ}あ^{ハシマ}双方^{ハシマ}五^{ハシマ}十^{ハシマ}石^{ハシマ}圓^{ハシマ}
さん^{ハシマ}大合戰^{ハシマ}と^{ハシマ}ひ^{ハシマ}と^{ハシマ}あ^{ハシマ}び^{ハシマ}要^{ハシマ}と罰^{ハシマ}と^{ハシマ}と^{ハシマ}あ^{ハシマ}
あ^{ハシマ}を^{ハシマ}要^{ハシマ}と^{ハシマ}衡^{ハシマ}して^{ハシマ}ひ^{ハシマ}と^{ハシマ}あ^{ハシマ}び^{ハシマ}本^{ハシマ}傳^{ハシマ}を^{ハシマ}參^{ハシマ}の真面^{ハシマ}
実^{ハシマ}よ^{ハシマ}ひ^{ハシマ}と^{ハシマ}脣^{ハシマ}と^{ハシマ}と^{ハシマ}うと^{ハシマ}自由^{ハシマ}自^{ハシマ}在^{ハシマ}筆前^{ハシマ}
よ評^{ハシマ}す件^{ハシマ}と^{ハシマ}あ^{ハシマ}び^{ハシマ}と^{ハシマ}あ^{ハシマ}ひ^{ハシマ}セ^{ハシマ}み^{ハシマ}うと^{ハシマ}よ^{ハシマ}と^{ハシマ}
か^{ハシマ}うめ大^{ハシマ}敗^{ハシマ}北^{ハシマ}方^{ハシマ}よ忠^{ハシマ}義^{ハシマ}の士^{ハシマ}の^{ハシマ}よ^{ハシマ}なめ^{ハシマ}よ^{ハシマ}ト^{ハシマ}死^{ハシマ}す^{ハシマ}と^{ハシマ}
あ^{ハシマ}だ^{ハシマ}み^{ハシマ}其^{ハシマ}美^{ハシマ}名^{ハシマ}不^{ハシマ}持^{ハシマ}と^{ハシマ}お^{ハシマ}せ^{ハシマ}と^{ハシマ}猶^{ハシマ}生^{ハシマ}る^{ハシマ}如

見乃志外
乃志外

一とひづきをもどろきにすてゝの眞面目のことをよ
あらそむちでかわらまとの仁ま西王又於神作の仁
萬もとて一大奇にとせられしるまことより自を自立
の革之俗難宗談もんとおもふて信ひよき、そ
よと諭定さやふりてうごまハモレホス人々
本ほの眞面目とすとあごハモレホス人々
恵ふをぞようづみる又洲壽の火は後じよつは
よ多うぐそ外ヨリ敵躬方うくゐる兵卒いう
もあぐくろいふといそゞめどそハ大體とあはれ
前々評ひひる如くせしに今を出そ義成が數百

船と柱つくと八百人陸の峻築とうぶひくうたハ仁
萬ハ船へもとまよ死あやじとみて勝とあら
そするのあぐらんやぢよ殺だともとせざる系
累と仁の弓矢はあく死亡ハ勝敗の自がじ然
義成の仁よるかくそー主とまに令つてめきてゆめ
双方をすよ圍圓おもよこくがよぶよぶが仁軍の仁軍じんぐん
ところ今こそとれきれきがいよにとあせ、とて三弓の弓
を込の討死をやうじとくさんよ意をとやゝと
そきあひて神業じんぎょうへくるもあくどよ蘇生よれ
けう遠く御寄行徳までてはよそよもよそんよそ

よりかゝて早馬早船あそびあそびめど大合
戦の討伐をばく蘇生させまごうつ體をえまこと
實べきうん行徳のよのまごうもあらう自分なり
波寄の神主よ遠まく自れりやれいもどるよ
了全ねつまゝろひ蘇生せぞかの二訪の神主かな
ざま全ねともとぞまやすうちまのあらみがまくと
セ一大奇にと召もゝとすのまゝ波寄行徳まで
ばく蘇生とあらまにドサキロレーカの兵ナ又
考が悔言とぞかこまよハナびておやう波寄よ
てススのひまびのあらやちうさやうそをきゆう目録

モテルバ大水陸衆見と度まゆめ眼あらあまよ
自家の死亡も猶又仁意のあまねきじまびうど
やうひえききかふうと何とか仁義の軍と
昏ニ召もつくさうと申〇其経験ハつゆこう素
よこわくらうとくかの候のまへまゑ伏井井助とくらん
さんとゆきはらめびあらじまくとゆひまくめ
きくらあらぐ〇取ハシ一齋葉の神葉えとふ
クもと就きあが解きつまみ取ハシふまうとまもち
諸々やめりすまうすばれ不審し又せん解とくと
あぬすゞこ五ふなまきをまハ今まうさんとま

くらしへどさるすもさまき。ゆうごも、きいふねにあ
ちのくへはまよつてせぬあるひいよ神せあひのハ
とあまうの自せよるつてふゝあんらそと筆端
神通をかざるのみまわりやりをとぞりて
ところが大自や自生のめ筆しる。ところへ神
宗仙あよろみのりやあくるハ和漢子の證あま
ほうきとまもておまよ自ゆせうりまうと大
自立筆とたへよ。○義歎次の年尊飾二御の
民よおひせて徳國とくべを城とづらをもよまか
くあぐまうをそろへ二合半新田村などより

虚きよ実じつのあひごとあつてゆくろへ

百七十回

○記き唐カタマリ代に郎紀六カタマリ太タケル施セイを丁寧セイを令セイを
きのきシテ私シテはふさるシテ議シテ出シテるシテの意シテ言
つゆまでシテりうへ頭シテ人シテ秋シテ李シテなど副シテよシテあむく
か三人シテがシテあくまくのシテは終シテきシテ細シテ筆シテあるシテは
兄シテ弟シテがシテ失シテくまシテのシテがシテハ著シテ翁シテの筆シテ例シテのシテは
すシテをシテどシテふシテことシテわシテきシテあつて松シテあシテ月シテとシテくらむに
孝シテ廟シテ名利シテのシテあシテやシテのシテ義軍シテそシテ首シテとシテうざシテが

まふそち黒との仁軍の令と合へりぬとくゆうア
あまづな副シテ一勇士イニシヤウをもてすはとアセリ
義軍首シテモテシテ、左羽の敵シテモテタヤモ
首シテモテ又忠義の士の死シテモジトシテアモ
ロードキシテミツモササゲ耶シテ又同ドキシテナシ
○直え逸アヒテなが豬シマの寺シテシヒアマ、諸願シテ段シテアシ
タメ車シテタクシタモタモヤシテモカモアタマ
アシとミテ二人の言シテモアシテリモニシテ二ニ目ムカシのアシ
シヒアマ又アシヘハシマフタモタモヤシテモス
信シテアシ言シテモアシテタモアシ猪シマの奇豬シマアシマフ

アヌニシテアシアシテアヌニシテアシモアシシテアシ
トモアシモアシシテアシハ大豬シマの大寺シテアシ
キシテアシモアシモアシシテアシモアシシテアシ
アシモアシシテアシモアシシテアシモアシシテアシ
虎シテアシモアシシテアシモアシシテアシモアシシテアシ
ねシテアシモアシシテアシモアシシテアシモアシシテアシ
城シテアシモアシシテアシモアシシテアシモアシシテアシ
京シテアシモアシシテアシモアシシテアシモアシシテアシ
奇猪シマモアシ虎シテアシモアシシテアシモアシシテアシ

まことよめと威心敬服。○紀八が日暮をあつまひて
議す所あるをもあらむものかのところの力やうより
あらそまぐるをつづきせり。其議をもぐにほえ
ておはきをちかべんとあらわすは陣せん和ひにかふ町に
アリ。すとまきてえとしてあとからあるとてハユ会と
る一だいが議して信八をえうへし。あハ村勞をふと
るととくとねまゆる。ユ会もさうむねづく
よれもさるかくわらん。かまうにう伝乃ハ紀島モ鷲モ
トあひとくして全勝のああとやべく。紀八がひと
おあとをつんとひぐる。あらぬ役割をもどせまど

まことよめと威心敬服。○紀八が日暮をあつまひて
議す所あるをもあらむものかのところの力やうより
あらそまぐるをつづきせり。其議をもぐにほえ
ておはきをちかべんとあらわすは陣せん和ひにかふ町に
アリ。すとまきてえとしてあとからあるとてハユ会と
る一だいが議して信八をえうへし。あハ村勞をふと
るととくとねまゆる。ユ会もさうむねづく
よれもさるかくわらん。かまうにう伝乃ハ紀島モ鷲モ
トあひとくして全勝のああとやべく。紀八がひと
おあとをつんとひぐる。あらぬ役割をもどせまど

ああくとこがまき○在村帆まひの首をき骨を落
る手をすうとへるうし、
人様とぞよひそりの後詰かくてハ又立すあえのや
うもすくとくとくあとくして凸凹あじのひ
そびそみくらうとくおふしむらうし○ゆ放ち
くわく頭人等異日其主はるに暮と告ぐと
よういづれも感とう悔ておむせの後まで境をふくと
す手くあくらよみのまに徳のちのまく今まく又ほの
言をうくくんさて其本と黒仁玉の徳あどむ一舉
又仁玉の徳もよしむじの縞の附言あじう又

別よをまみく言あじうそハ久くみよあひかむむこち
といせまと君徳を仁と臣のうそ旨くハモテウキ召
めくとく言あじしがそく房へ身とこうてにまふ
くまうそく仁玉の仁玉わくとこうと種てあくよ
あくふさるそまのくいふあふだ大自由自在は妙業
威服こと教服○信乃が次の日あすねへがぬ陣より
召き又そハ昨日をもどそのハ後回すあもる朝寧を
こまく召する文の一格よもハえもうそくあくうそく
ユ令のをすろきをすうまくと誰が召するぞやそと

詳りゆ
務の実か
知音の言と
以て

かすう一ふどさんかあうかこうさとしがねハがお大
考えの浮死體のスミヨコシテ士卒のまもふの混
れあらや、とてあとから小みつまづくはよせぬと
をうる将もろきのゆめうとくう例ふづくの合
せき奇ぬるまへ朝寧の屍體医はあてねハがそ
うひきりするまくへ意外の大奇姦ぬるまを
かみ身の怪難うめく又朝良の一類りふとま
為墨寢房たうじてうへて門ドアも難鳴くえまう
そがあれこさるをれ其人甚る大は黒うていもくを
ちうみだまうまへこの朝寧大黒あくところが意外の

別奇こゑあつてくとをすとめごとくかそへとうと
例の癖革^{へきめ}於癖革^{へきめ}のそん祝ハが將難^{まわ}まわ
合^ある自^じの幸かの小造化のなまニシテソメハぐるの
黒むらハ著翁の妙革のなまことくしてともよん處^しの
えうおよびのぞうこそう奇^きくめく浮死體^{うきじたい}とこくす
セキヨニ所すハ虚文^{うきぶん}てふまえいづひとくとくえ
ーく脣つくまゐあくとあふんかすりすのあく
すハ又^ア例の大自^じ革^かふうまつ務^むび^ムあまぐんや
奇^き絶^{ぜつ}れま^マ○浮死體^{うきじたい}もあらが道^{みち}の矢^や
祝ハゆうとくわいかくめんとふどうんで例のま^マ外^カ

祝ハシ推思していきゆみとアスルヤ、リヒトモシテヌリシ
ちうふか約束めあくまを外甲曾あくよ流モド
て流流もく奇ハチヤんとアハヨシモムメテニミ例の
五トモアキモキシキシホタツ屍體あく川とさうのギシ
シ又奇シテ射シムラウアシニシナラモト放モ遠く
流里モクセハタクシモク救シテクキニキニキニ
奇シムシモシシハセシ神丹靈め狂ひシモ神丹アモ
アモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ
丹ハアモモモモモモモモモモモモモモモモモモ
文面ヨミモアハセシモモモモモモモモモモモモ
モモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ

今ノ羽寧ニハ神助アゲマリアモアムシトガクのめモ
辛うテ魅生レシムシキニキニキニキニキニキニキニキニ
雲霧の奇トロトロトロトロトロトロトロトロトロト
仁ノトロトロトロトロトロトロトロトロトロトロト
ナモ奇アキアヒニ義通のたゞニ奇ニシムシムシム
シムシムシムシムシムシムシムシムシムシムシム
海崎の勝利とサムヒト朝寧ニハナモアモニ
シテ其兵を以テ全勝ト告ヒトキニシムシムシムシ
ニシムシムシムシムシムシムシムシムシムシムシ
神丹とほどモ大医カラシキの所歴一也若ニモモ

序り也モ經也
戸馬の序也
戸馬言ハ常有也
とも思人歌浮

着人を序其事
きりかえり
かての物を度て
何と見て作
者をほきゆる
にち是士居す
の言ふるや思ひ
洋翁の名不取
るといふ

ことよ即効ありて一ノあうどま仕合へ筆あ
まうのなまよきみがみの一筆ともひくとてほら
呵く。首今半丁せんとレバ一ふく。○半丁よ論じて
得失をきこしれしる至談深也又さうよほの地伴どう
言そんニ矣よ本件よりこう深くもあく
あづべきぞ。

百七十一回

○信乃親毛馬等甘利の城より辰相つゝと全勝
のあゆとつづる。義通をすと、かむをやぶつて
両拳のれあるかまうべとまれて死ハ寺子ハまく手

古内ちくみ従軍のとおひ跡跡二年といえと一人も
死そくわのをきる。又改毛太等ハまくのと辱も
ふる何ぞうのとすもあくざんざるのとまえのとま
煉革をもふ廢ふ。○義通がそふくの軍印と
どうくよあげ林にてかのをひくしげふとまく
賢少年三石の特種かひさまなむか。辰相がまく令を
詔書と称參みよ。あよ信乃が婦人のにまくとあ
なび丁寧至言至あ。詔書が識遊。○信乃が旨意
えきそぞおの大合戦。ひくの數伏あくぬに軍よ
召とし奉と十石の榮あらまうとうとあらぬとまく

○信乃が雲猪をひふまへあまへてめく女猪の事
アホムシヤミミモテアホスヌササ助あんるモ
カクアミ文面コミミヨヒトヘムヨ召るマリモニ
シム車と燒けはのらくちやくキミハシモウルモ
燒葉ナリ再ホセーとスラクちやくモク其後直え
送なが言フテ車と燒けはのりモムモカヨケモ
アキモアシモアメソヒ其猪の又あらゝめて射
方となモナムヒツヘジモ又其御のらくちやくモヒタ
射ハモ祝レ信乃あつまエリ射志感嘆モアド
そこモ其奇モヒ其神助モアシモハモの言モニ

辰相もよまでのつゞの中よりホーギモヒゾ箇
の中あバツフミヨモベシハカモウムニモテニシ
日ミ又カヨケモかくうヤマシ通モヒヒチメテニ
奇の神助もよシ通モサド深めの筆ナリシ
信乃が右をつよ義通が其猪ニ又一層の奇六郎
告びやモテ辰相其奇ヒツガミヨ説くおもろく
義通自らくそくつぶす者また辰相がとくべき
猪ニ又一層ニヒト説かまともその通り義通ニ言
ふまとくもヒト誰りやうさんたうと今かく召モニ

物語
ちよつて
ちから感ふ

をそんば是こそんこまことをこぬこもがふ義連よ
してハ今信乃がまく言つまうかごとく言ふくばじ
さふばと上もひそく自かづきよ譲つてそど
者モドキりひあてそみびまと辰相よひそとひ
丈年賢主ほえ老臣あざとひとひユ今
とひきりへやうらくぬ○大猪おのゆへもゑを
がよろくハ圓の陣へ本見とて成れとわうふくと
ゆくへゑぬぞありよろくとてよどて寺猪のらくちやく
けくそみくぬあハモヤミハモヤモヤモ字眼
替へやのちう成氏がみのうてえ辰相がふぐもとてゐ

そふくちよまうつせぬまん人多きハ是和敬茅の
すがきといとかくまくあいひがむけたる感く信乃が
けく大奇と称へきてソミシ信乃次ハ成氏のすがひ
をもるすハおよそぞよきくあんどおえまくくまく
そくよく深きだ義を明がる直え寺がそくこよせバ
卒十朱百朱の場へと落あんことをで妙靈豬の奇とハ
さてく奇ぬ奇絕何とかともいふべきえ榮をく感服
敬服伏狀神靈もよやうて革研の神通廣大。凡智又
さうかきんやさしく奇めまじき九作あべ信乃が
取八が盛氏の自殺と云ふがもてゐてすこゝであ

化作と比興ハ
本末か有り
化作かに多く
有りまじかく

至を惟者を蒙て
尼らうやふがち
あてらるる處
とれ與せた當て
もの中もあそり
んや思ひて
あ

みよてそそぎて至るもあそひとこと及ばぬる事無
雲を壊ごとくう佛家よりすまニキニ天とうむまびす
上と大本営の座のそよ庭とめちがひは遠くもあらず
従あぐるがそふどを軍よを信乃取ハが成氏あり莊介
小文吉が津衛あり孝嗣が定正ありさうとおもひ
如きれん作のやうぢるもハモロんをくほそれくよと外
のゆゑ起さうとハ自ゆ身立革うふさてせ天猶信乃
取ハがためのそくハ標用の表盤ゆゑか侄子の和陣玉丸
あゝさうゆきゆゑのゆゑわちうんゆぢくふ諸もあく
勝とくとくへるあう討くるあう森通のす強敵景春と

勇將ハあんどうそくつると討くるをくそつて危難よぬび
くうじて先發こなびきハ取多か孝嗣がためくう森通
ハ慘殺よふとくぬ弓箭のたゞ勝軍あんよハ其のの諸
勇士より柄ハあそび一大おもとへあそびうそと危難あれ
ハこそ義通よとあそびうる者アとれおきほらこま
とかふがともよ追もぢよことく徒士のく柄ハ宣下
義通よハあそびあそびよとくとくとく徒士のく柄ハ宣下
場ハおまのす柄場ノ俱教ニあびよ寄合五事

御神行の
至れう假て
そ真と便を
書うか

好評ある
ところにて

そめ取扱ひあり奉通の如男ひとびうじの辰相がいま
ほうて國みの傳せりかくてハ危難のみまこともよ勝も
いゆるとき一カつと諸君の勝ひすのほどて國府の臺
一軍の旅ひあせばさあまも奉通の勝ひすのち
別上ものいすの手とてふうそせんど内にけの一毛危
難のみまこと花せよバ此大猪成氏の奇花あつてふうも
はゆるこそ二番領の下まんぞ貴よひしてハ第一の
主おとくべま底氏と號するもとハいふも花あらしわ
あらざや其ものたぬ又み信乃院ハのをひづくもうち
奇猪のふれとくうとせんえをくもぬこめく

猶標目ことをひととあげてあれ奇猪もとせね
陣玉花あくまくるハ海ののるのミアんや駕車を複
ふくもあて火箭のをあへとうせみだん六十五頭もとてか
陣全勝の花あくまくる一大猪の神物くるばくまでま
六十頭そやせヒニヨリのめなとど信乃がもろ
とこうの火牛よかくよりうてハをもろん以す摩利支
天河系よ流見よう奇しくも人よ馴くるハ後よぞ可あ
んじみ伏昧神靈あくかどめ摩利支天と神そくうよ
もうて手つかくごろかとバ允豬もとてよ神わ神使
えふくふくよ出没自在猪ツ大猪ハ寧ろまゆ

まかのあく
らの穿鑿合
例へば解り

駕とすのやう神犬の化けあらスハセト九猪をまよ
雲わ「みバ候」て一大猪とありしるうそぞもよことよ
神亥子スミコトコトとつべーさて義通凱陣の後
うまと堂科察タカサ伏赤ハシナ木主キムツこまき西めあらびよ野
猪をかひくる者たふの實ヒツその後詫ありてせ二條と張
ざれしふど六十頭又とようきりともうごどもその
とよすくふかはあらび羅氏の作あらびきほぐ傳トシナガ
妖ヤウたのあらびとくはエヤモのくはあらびとくろ
いよくぬくかやうと称義の言あらびがくふとう
正邪セイセイのたぐひあらびと五猪ゴクをきりと召日シギび

さてこの神使雲クモわあらしる流フロウしおどりへゑ
あすばさんて神亥スミコト御ミコトめりよく深シカク春日カスガの麻
山王マカニの猿アマあらばせとくかくぶーえんはまくとハラシたゞがふ
あうとくらうをまくまくとくとく深シカクぬまことふ
かみのちの一傳イチデンよあらばせと火牛ヒヌゆりゆの三外
ぬこのおと山奥カミナカもあくみ里中リズウもあく止まざ
しろみをとハアニ猪シカはまのやくそくあつてそのにま
そと軍の用ヨウあらばせとあんふや赤カミナカの神助ミコトのま
猪シカよよりある麻カミナカ天アメ軍神ミコトのまうあもせ
まづて車カミナカおあらざらをく感カミナカよもあひの陽カミナカるま

本輯又火薙のよりみどりして再びの手外風がま
かけとて大手外をもすりをまうる大達めよこと下
火猪の一條ハモ外と大手外手あひと大手外の風をう
感ひつづきやしをしあ輯おほのふかく風ひの限の
中よ火手よかゆみけ手のねあが山歎と里事よ
あまこあくせてさん人よと馴あまふううとすのあ
こ歸のやくそく放津即ち暗よあくすとばそめづぶも
有づきよすみぬハ安らんどそめすとごで寺のまよバ
火牛の秋もと召さんとみそめづくよ召うせうふくる
筆うとぞうはいきとふぐとおひえのやうとももそう

トサもひてあくしげ本輯まくと外のめ辛よわまとだ
拍手大威セシテ鳴呼りそくへりそくへりセヒトハま
いよれん猪くろとあくからめ神靈のようて従使よ
の玉義よりよごと下めうして奇くらびきよもじく
奇くらんとくらんとくらんとくらんとくらんとく
とうあまがとくらんや鳴呼りそくへりはくらんとく
崎行徳へ使とかそ議の序よな嗣あうとすとえくらるぬ
をまくらんとくらんとくらんとくらんとくらんとく
ぞまくハ其序よな嗣よな嗣よな嗣よな嗣よな嗣よな
座もあんとといふと玉そく退かせら例の廢のをも

信乃歎きあが謙の理譲るハシトモキ一稻村きくさきよ盛
西よりあら此時義成ハ洲崎の陣上あり稻村きくさきよ盛
いきうちづかー上洛の一件ハ老侯の意みをみバタア
ハ源向のまゝえニハあくねうどせとせと老侯のきみをも
とあえと次うて候ぬと先よとべきもあれば義成
洲崎よあかとおをほくる稻村きくさきよ盛
さるやあん○再太郎就今が大川大田の使とてあ川
とさうのぼうまで勝軍を告ぐその文中原胤クが深手
こそ危きよアムほのうゆやうかつ奥よ神舟とて難生
のくひ合又信乃歎ハへの召すよ再就ニテ年のみを

のせあくさきよ義通ひまくであらうてそこの言をもす
まべてよざくよども併教ニトゆきあそびじハアハ
陸みどりとくあぐー併教ニトゆきもじひくとやく
セ先あうてかくこのゆかみヌ錦で印と洲崎一ある
らセスヒヨ朝寧がにとてかくの勝ちをみるこ
もく何ぞうめのうもあくとど國府奉の全勝を
てみつどりのよまと召すとゆうとつぐの中の一トつぐ
安政三とむそくをよせ二年ある韓よせせりか文
若ゲテの言ふどもあんハ洲崎への使つてばまやうす
どよくあらハニテ年いまご義成の見參すみあま

まあじさよば勇功へよあれ文年かて本陣ニ使シテ
んきよハ御士シテうそシテをとる有るの盾持儀杖ヒヨウ少
あるべまよそうそて文年ヒコトよ使シテ通スルの
見參ミサム入ひまアヒマあそぶもシテさんシテえシテ走スルあ
いすふシテくシテ役シテ積シテくシテ○カタチ素
も若シテふシテ武士ムジキを欲シテむシテいとシテこシテて
ああ何シテまゆうシテるわやうシテこシテはシテ一陽イチヨウの長
とシテあぐシテあシテハ二人ツのあシテもシテ萬ミリ人ジンスシテう
のあまでシテかまシテて臣シテとシテよシテハ黒クモ人の家の毛モ
毛モからんシテ只シテ氣シテと使シテひ男シテみシテぐシテ

信シテひそシテり
路シテと照シテる

て兵士シテ欲シテむシテてシテぞシテくシテよシテうシテそシテそ
俠者の貫目シテひよシテそシテてシテぞシテトリ重シテうシテ改シテ因シテ大シテ鄭
三シテ六シテことシテあシテもシテあシテバシテくシテ何シテとシテあシテもシテんシテソシテ次
韓シテそシテほシテどシテのシテきシテまシテうシテあシテおシテ、シテ奉シテ副シテえ
ヤシテこシテくシテ○カタチ取シテハ逸シテなシテ施シテまシテれシテふシテがシテるシテ
文面シテあシテはシテそシテどシテくシテがシテゆシテくシテあシテユシテナシテミシテ等シテがシテ
あシテもシテゆシテしシテよシテあシテびシテくシテ文改シテよシテよシテつシテのシテまシテ
りシテくシテよシテまシテぎシテあシテざシテかシテ一シテ○カタチソシテどシテとシテあシテざシテ
信シテひそシテりシテとシテあシテとシテ取シテハシテいシテきシテ取シテとシテスシテ寔シテ處シテるシテ

ハ衣ひきかづきまくらの處ひう座すまはほと眉ヨリぞ墨あ
よき例のるふとぞみだうのるまですがゆみよきとつ
て眉とくろすりとく細筆むらを成氏が燈下よす
をくらまき頭とくん尾くもんがくそむる放上よあ
りてつぶくめー○信乃既へあびよ就義が成氏よ告
いよさんくのねぐらひとくしとくくダホ忠孝博
愛のいとうじゆきく真面目うふそりと御君臣や
二大より成氏と族一よあび成氏もと二犬と捨てた
捨てたみまくば在せがあまてひよハシムド令して報
えんとまざーうを情の旧をくさんどニ犬ふばう

あるをくわほとくわよのあつまハ前回そくよ
ひうそをとお回此條よいよくあつド信乃が芳流園
そくよとふせぎくは金とくそくみよあびにそ契の
寛よ死不ドととれハゲ行徳ヨ信乃ようもあひく
ゑぬ又つひよハキヌの寛よ死あんことをひく富國
のふとくうよのつせみばあく利のなきよまじ
よあきニ大が暗よ罪やみて去り明よせもあくみて
仕へくいさくと諭あくことくはあくに看官よあくとそ
諸事萬々承認もあく成氏ハとてあくをなうが
憎き居べきとぞ医心にてハこときうとよくみよも

二大のうちよほとあるがおもむきをうごとくとがよ白糸
てあまくあらは二大のまととを口じくわかくやく
わふわゆきすま双玉と投たて物類もえりやく
又信乃三せ因あく日あよえくび勢うみてそよと
解くるをやむことひどなぐもをもいたひて
あまた去くうれハ伊モセよ玉余とくけて捕べ
き人どぞく金をうそあひ醉やううてあらゆと去
うる其家にまかく女上者モヒタガタを曰てあきよみを
くそハ人よみをれ二大とてハ心よもづまおもんづ
あざ理諦モヒタガタとかがふいひあらざま今さよな回

よつまよよとあわせたる芳流用のむくへをもえ
か轉ゆぬままでそろひのよふをうそをやまひも
ようであつと著氣に三轉のそみくみよ筋馬上
くくくそがえりかくく明白たことさくまを量
きらん深遠脇をまいどくやまをくまことく
感服至極 敬服至極○記扁代郎等又考勵著
をうちかひて謝嵩の傳管(むよくよまくせよばと)
道ともうござり行徳よりえをもとでよろま
半丁自注の文のあくよばズもくはとくふざ
軍監をひどといふことハ精めやまとくねう宿

同く又及ヒ永暉
佐竹秀徳宗
帝々全輝小
ミラリ色在を
燕青々相謀小
訪もつゞけ
あは是れうそ
もれた似よち
きも汗血ハ
モト不ふ不^レモ
本末少黒毛う
取多言の理様ハ
今紅毛モ及

作者のゆゑ
かうえ故に
之罪く

べきるをもどほんいふもぬうへ手まうふ○石渡の
千葉の城、そもとあが良干としてすこしむよすうれ
こあるうち祀して奪ふよあくを狩りて空城よすあ
やどとそれがたのよからまにドは圓は孫全の山内の
鉢と負往か廻らるもすにドは一其実ハモセガ
一旦そそぎてハ敵と戦ヒキよたゞごとて立十子の本
をとるのみこのまうもふど復きよまやよ協と守ら
らまうこつまつてハ勝よつて奪ふよ似のよろひあ
とくでぞみくめぞくめぞくをつせんくる序一面白し
○社今小文君次國太卿三人にての画令双方さ

こそ本をよ有ぐめ社今小文君が片貝をまし筋
立よまざまとこづのよことせ年あるまの詫評
よほのうがちといひくじよ後まことくべて妙れとすまれ
とくじ言もありいわく後悔のいづるのあくよくても
せかふとづんざじを誰の言を解くるあうてたまやく
ゑふと感服をあくじよのほきしやうよまのよど今ま
すばいづれの轄あくじととみよめひかへいがくそハとく
今まよあんがきよとまことよおびとつせんくら
ちるよ遠すよままでかきよくあすよす一猪
○再太郎乾今とりぢぢひよ侵敵ニ使して國府憲の膳

を行徳よ告つあくさくよこよせせり小文書を俱教ニが
來とどみゝその勝と雪まよ言もセースれをもみ
朝寧がにこそ御書の様のちるきとやうるの言もセ
えのゆきもせふと有ぐるのやうもむももも
著翁の筆よとあは書べまと書もがみとあんや
文よ積累あらすはつとモーセヤもももて積よ
してハニテ傳のびるてかりまきく黒うすがかつて
セやしよきよすむる本輯云ふまで有来一すとあん
長あくひハ短よかくセモ一地文書召もとくと
どぞとづのて有りとうておとむらはことくよとふ

までゆゑども召ヨシムアゲーさんバ右よしむるの
ミあくと教房が承をふ一のちうども有るモモーお
こよみ代えべきかのせう小文書がごび改國史録三
ぐ再生のまよび幸をもとてすがく久等が義
効まく我死をうぐみーすがくをもとくとじ
もくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
ぬ徳とはめふとくとくとくとくとくとくとくと
うふうはくとくとくとくとくとくとくとくとくと
べー仰ー教をもとめでくとくとくとくとくとくと
ほゐるハつもあ陽よこすうつー絶筆とモーおも

是寫の穿鑿集

理論を佐える
てあるのは是五
禁の四つを
許すことを
許すをも

とす

半房は主を君
親と云ふと
説を自解と
言を盡され
生もそぞ詞少徳
へらるる所
からうの役百
言を費さず
あらざへこれ
はは西風を
ははから

先の春の(ツ
きへんをある
うかの年正
年を惜ちく
なくもむれ
ゆもみとひ
あらざへる
ははから

日暮まぎみられてゐるやんやせういきうを文面をう
がみてつよの言ふあらばたがふとつてはタ一くまぎふる
やんとやうスラセやうかなと解きごろまでよ日暮するすり
さふどお革がうがうまぎるところ有りやんれ
れもうがもその言ふあらば○今ひとづれとえうぐ
まあじ解してつよそ時ぬ真六五十年の城とあうあ
房とあうがちハヌの知りあることわざと信ひよす
てあうあくまをすげきなふどある文面とあうがふ
狩文の素と見て大やうに安房と日暮するがふ
をうえの文とあることをあざとひてよくからべまぢ

是事の空叢集

理済を佑えり
ておるのとは是五
禁の四事も
許すことを
なりと見て

親監親と云

乳母の亦母へ
猶父母等
保質あると幸
子の城ふ在と
牛房ふととし
るを終るに附
理原た

の人がひりて
ちくら旅者
と化郷へ
とてそとてテ
人あらそとそ
久のほは曉
る所のあら
すと終ふ附
理原た

眉まぎぬられてゐるあんやせういきうと文面をう
びてつよの言ふあらじたふとつてハタへくまきふる
やんとゆうぐわやうかと解きざるまでよ眉よくすり
ふと詰筆れうがちよまぎるこころ有りやんぐ
れとうがもその言ふハあらじ○今ひとづれとスうぐ
まあじ解してつよの時ぬ真六五十年の城よりあ
房よりあらざるわのめりつあるこころれんと信ひよ
てあらあらとすくべまむどそのる文面とあらうぐ
狂文の素とせて大やうよ安彦よと眉よくすりふ
をう文の文くることあるあらじてよくなるべまちる

るハそのをとハヌシモミモ一言半句もあらず
さやうよがりそくハ空がさつて先入主とされてほめ
旧廢のなましまうと○安房よままで更と記ととまうと
らよ路草かの軍監の解ハ吹せねば少くせとぞさあらう
てハまづ西道してゆくハゆくよどせ行さととまうと
洲崎の本陣ヨマムとあほざうち行徳とすと
うをかどバこのゑとあは老候義実とさるとあ
べーぬ真ハ祖母ちむと祖父母おと曾祖母おとおとす
すとあらうとよだと祖母ととあんちととと有
う、文面のあやよみハタゞく、眉りとあるといふ
理原た

人告ふるべく大をもあらう精華よそひあらざると
つづきやうもあらざるとど昏ふべきほどかたひれ
目とす間を大戦のばくさうと著翁すて昏む
さうとおどりすがまや昏むとて常人もますて行
儀者となむと
えといふれと
寔と詳説の書
志かみるきと
ある

行ぬめ真がわんむねをもぞひだりて信ひをもろ
ん告ふるべく大をもあらう精華よそひあらざると
つづきやうもあらざるとど昏ふべきほどかたひれ
目とす間を大戦のばくさうと著翁すて昏む
さうとおどりすがまや昏むとて常人もますて行
儀者となむと
えといふれと
寔と詳説の書
志かみるきと
ある

後回びとぞよ今まきのるあらんハ必定あべておまよ
こそす君モモハユ会あきハアシムのゆゑもあらんとがくえう
かみひくらまきと例のま鶴りよ窓櫻してさて自解
かくと昏ふべくとて又モテリふと假もうごハうぐ
ふまぎれ自解せとては自解せざるをハ益えき
筆つひえとての長言ハ昏むやうむ〇軍監の積ぬ
ハせむよすよひくらまきと積のみあらじみをやう
るのかまごひのゆゑもまきとてハ感心こ筆つひでう
の小集の画面又ト文共が肥大いふと小文書ふのま
をかく人をびて落とす人あらざれば相貌ふ

えとやくふともひそとさんかだもるくしゆすく
○せゑまめう教よ前歎の像贊をむじひれ
くまえ難うてゆるへ

百七十二回

○五十子城中前輯のよどよしきひ唇かこして
又二驍勇をそらひて然ニ海賊名のいきよみあ
らきの海翁王寺と伯仲とあくまでそめもあみ
へあれいあすみ我よよき先鋒まづ一段のいき
ほひそそり船三萬よろこびあつゝがくすとくすち
ヨ立萬よなべ軍威わづらを大あひてハ破る

よをえす一船五千艘をだつて十萬餘
とよあするよをあそむとよく敵とまづとり
ひ一ぐわつて和漢とよくすよとばらぶきも
あくさど里とあくまで仁義軍定正の邪軍えら
あくよせ兵船とぞりたる雪懐のたゞひつゝて
うち○憲儀褚進沐治しては久代登山往來
礼與諸君とほおがんくへ風外真ん中のやうよ
鼻とうごくさざくて善哉よきわざくためまくす
ときみつとおりて仙鶴姿の顔ぞくよかくまよん
んづぶ必ふきあそてすぐくろまふどう

まみよ ○ 五万の大兵千の弓矢あり
りんすすいほひふ八千鎗の三のめあくとるあぐく
さくみてよもとそぞろもきまどかのとくのを
あじさぬえうふぬまつおはし一邪軍のたゞくはを
さうせうとをやうとまくふどスあすば字をく
め衆邪大あと魔軍をかわせざてりうを神軍と
もとづまきはあうてこまあくわうんよしきみ
りんとわりえみてとく一兵あうかの真人のれ御
たがを間もまよかな三浦は遙れよく神助神
風のむちひをあていまみへあ人と文外となひそら

うみていくとうへるよ各つるふくらみみ
姓名づれそくへ寄りめくまざとあ韓本韓の作名
まことぐくおもろううざあくるを一中よハこと
兵ありてとうときわくへ寄りめくとま
感せうもこふんわほう ○ 武田信隆が船へまち
る者人々つとかくこそくよしゆせあらひよとま
大おへ定らうとぞよるよとおまづくとぞ暗きよとま
とあらわのえきはつとく便に積くと ○ 晋六攻
舟の頭人であつた酒癖をもと時はぶくんそら
へふとひを殺さんとてかくつて殺さふくととが報仇

壬寅春二月

十七日社答所

著述者

のつよみと外のみへむちろんとそぞよつよめむ
う赤壁の機骨火攻と双方よまやれて見ひのうと
焼くふがともれいすき絶のほどひとぞよ前驅よ
拙評やう敵方の心をひそまのまよざ敵方の
燒草船とあが用ひを入ぬこり晋六ごとき頭
人あらとて其期コ乃び其船を奪もんよよ聞ひな
りべきよむすびぞ船の馬即の牛立がかもうて頭人
あるよゆきよむすび又其期よ奪ふの一トモう
あくよハ憲儀がよきく別教主定正と智慶顔
よえと敵の便利とあてぶの恩又おひうちをまよ

